



# APPENDIX **A**

## 設定のチェックリストおよびヒント

この項では次のトピックについて説明します。

- 「初期設定チェックリスト」(P.A-1)
- 「コール分類の設定チェックリスト」(P.A-2)
- 「サーバおよびクライアントの設定チェックリスト」(P.A-3)
- 「結果の表示」(P.A-3)
- 「オプションの設定チェックリスト」(P.A-3)

## 初期設定チェックリスト



(注)

Cisco Secure ACS を使用して Service Monitor のセキュリティを設定する方法については、『*Installation Guide for Cisco Prime Unified Service Monitor 8.7*』を参照してください。それ以外の場合は、Common Services を使用して Service Monitor のセキュリティを設定します。詳細については Common Services のオンライン ヘルプを参照してください。

Common Services のオンライン ヘルプは、[Administration] タブにある Common Services ページからのみアクセスできます。

Common Services のオンライン ヘルプにアクセスするには、次の手順を使用します。

1. [Administration] > [Server Administration (Common Services)] > [Security] の順に選択します。  
[Setting up Security] ページが表示されます。
2. [Help] をクリックします。オンライン ヘルプが開きます。

表 A-1 に、Service Monitor が MOS のモニタおよびトラップの送信を開始する前に、行う必要のある設定作業を示します。

表 A-1 初期設定作業チェックリスト

タスク	説明および参照先
Service Monitor	および Cisco Prime Unified Communications Manager (ネットワークで使用している場合) の設定
	「Unified Communications Manager の設定」(P.B-1) の説明に従って、Cisco Prime Unified Communications Manager (Unified Communications Manager) を設定します。

表 A-1 初期設定作業チェックリスト (続き)

タスク	説明および参照先
	Unified Communications Manager のクレデンシャルを Service Monitor に追加します。「 <a href="#">データ ソース クレデンシャルの概要と設定</a> 」(P.3-2) を参照してください。
<b>Service Monitor およびセンサー (ネットワークで使用している場合) の設定</b>	
<b>NAM の設定</b>	
	NAM を設定します。「 <a href="#">NAM 設定</a> 」(P.C-1) を参照してください。
	NAM のクレデンシャルを Service Monitor に追加します。
<b>Cisco 1040 の設定</b>	
	1 台以上の TFTP サーバを追加します。「 <a href="#">Cisco 1040 のコンフィギュレーション ファイルおよびイメージ ファイル用の TFTP サーバの設定</a> 」(P.4-2) を参照してください。
	センサーのデフォルト コンフィギュレーション ファイルを設定します。「 <a href="#">Cisco 1040 センサーのデフォルト設定の設定</a> 」(P.4-4) を参照してください。
	バイナリ イメージ ファイルを TFTP サーバのルート位置にコピーします。「 <a href="#">バイナリ イメージ ファイルの TFTP サーバへのコピー</a> 」(P.4-3) を参照してください。
<b>トラップ レシーバの設定</b>	
	Service Monitor は、生成された SNMP トラップを最大 4 つのトラップ レシーバに送信できます。「 <a href="#">トラップ レシーバの設定</a> 」(P.3-2) を参照してください。

Service Monitor で分類されたコール データを Service Statistics Manager (ネットワーク内に存在する場合) に提供するには、コール分類を設定する必要があります。「[コール分類の設定チェックリスト](#)」(P.A-2) を参照してください。

Service Monitor レポートに表示されたエンドポイントの詳細情報を取得するために Operations Manager を起動するには、最初に Service Monitor で Operations Manager サーバの IP アドレスを入力する必要があります。詳細については、「[その他の設定項目の設定と表示](#)」(P.3-39) を参照してください。

## コール分類の設定チェックリスト

コール分類を設定すると、Service Monitor でコール データが分類され、次のことが可能になります。

- 分類されたコール データを Service Statistics Manager に提供し、コール カテゴリ単位のレポートをサポートする。



(注) ネットワーク内に Service Statistics Manager が存在する場合は、Service Monitor でコール分類を設定する必要があります。

- CDR コール レポートにユーザ定義のコール カテゴリを適用する。



(注) コール分類を設定しないと、システム定義のコール カテゴリのみが使用されます。システム定義のコール カテゴリの一覧は、[表 3-3 \(P.3-22\)](#)に記載されています。

コール分類を設定するには、次の作業を行います。

- 1つ以上のダイヤルプランを設定します。「[ユーザ定義ダイヤルプランの設定](#)」(P.3-25)を参照してください。
- ダイヤルプランを各クラスタに割り当てます。「[クラスタへのユーザ定義ダイヤルプランの割り当て](#)」(P.3-34)を参照してください。
- ゲートウェイコードを設定します。「[ゲートウェイコードの設定](#)」(P.3-34)を参照してください。

## サーバおよびクライアントの設定チェックリスト

次の作業を行います。

- Service Monitor サーバで、`NMSROOT¥databases` ディレクトリをウイルス スキャンから除外します。ウイルス スキャンのためにデータベース ファイルがロックされると、問題が発生することがあります。



(注) `NMSROOT` は、Service Monitor がインストールされているシステムのディレクトリです。インストール時にデフォルト ディレクトリを選択した場合は、`C:¥Program Files¥CSCOPx` です。

- Service Monitor クライアントでは、ポップアップ ウィンドウの表示をブロックするソフトウェアをすべてディセーブルにする必要があります。Service Monitor は、情報を表示するために複数のウィンドウが開けるようにする必要があります。

## 結果の表示

表 A-1 の作業が完了すると、Service Monitor は次のようにデータの受信、分析、および表示ができるようになります。

- センサーのレコードには、60 秒間のデータが含まれています。つまり、センサーはコールの処理中に計算された MOS を報告します。このため、Service Monitor がトラップの生成を開始した後でも、コールを処理できます。同様に、コールの処理中でも、センサー データを Service Monitor レポートに表示できます。
- CDR は、コールが完了してから Unified Communications Manager によって書き込まれます。Service Monitor が Unified Communications Manager から 60 秒ごとにデータを取得したとしても、コールが完了しないと、Service Monitor はトラップを生成できません。同様に、コールが完了しないと、CVTQ データは Service Monitor レポートに表示できません。

## オプションの設定チェックリスト

オプションの設定作業により、次のことが可能になります。

- Service Monitor がトラップ生成の起動に使用する、デフォルトのグローバルなしきい値（コールドックごとに1つ）をアップデートおよび無効にする。
- 最も影響の大きいエンドポイント レポートを、毎晩および毎週自動的に作成する。

表 A-2 オプションの設定作業

タスク	説明および参照先
<b>グローバルなしきい値のアップデートおよび無効化</b>	
	グローバルなしきい値をアップデートします。「 <a href="#">グローバルなしきい値の設定</a> 」(P.5-3)を参照してください。
	グローバルなしきい値を無効にし、選択したセンサーに値を設定します。「 <a href="#">センサーなしきい値グループの設定</a> 」(P.5-9)を参照してください。
	グローバルなしきい値を無効にし、選択したクラスタに値を設定します。「 <a href="#">CVTQなしきい値グループの設定</a> 」(P.5-4)を参照してください。
<b>最も影響の大きいエンドポイントレポートのエクスポート</b>	
	「 <a href="#">Most-Impacted Endpoints レポートの設定</a> 」(P.3-19)を参照してください。
<b>レポート関連の設定とシステム スケジュールのアップデート</b>	
	診断レポートのデータ検索の分数と CSV ファイルにエクスポートするレコード数をアップデートします。「 <a href="#">診断レポート検索と CSV エクスポート制限の設定</a> 」(P.3-41)を参照してください。
	システム スケジュールをアップデートします。「 <a href="#">低ボリューム スケジュールおよびデータ消去の設定</a> 」(P.6-2)を参照してください。